

夏目漱石著「吾輩は猫である」新潮文庫、新潮社

1961年9月5日初版、2009年9月15日第110刷発行を読む

吾輩は猫である

わがはい  
吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生まれたか頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめしたところでニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。然もあとで聞くとそれは書生という人間中で一番<sup>どうあく</sup>癡悪な種族であったそうだ。この書生というのはときどき我々を捕まえて煮て食うという話である。然しその当時は何という<sup>かんがえ</sup>考<sup>え</sup>えもなかったから別段恐ろしいとも思わなかった。但彼の<sup>た</sup>掌<sup>てのひら</sup>に載せられてスーと持ち上げられた時なんだかフワフワした感じが有ったばかりである。掌の上で少し落ち着いて書生の顔を見たのが所謂人間というものの見始めであろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛を以て装飾されべき<sup>はず</sup>筈<sup>はず</sup>の顔がつるつるしてまるで<sup>やかん</sup>薬罐だ。その後猫にも大分逢ったがこんな片輪には一度も<sup>でく</sup>出<sup>で</sup>会<sup>あ</sup>わした事がない。加之顔の真中が余りに突起している。そうして素の穴の中から時々<sup>けむり</sup>ぷうぷうと<sup>む</sup>烟<sup>む</sup>を吹く。どうも<sup>む</sup>烟<sup>む</sup>せぼくて実に弱った。これが人間の<sup>たばこ</sup>飲む<sup>ようや</sup>烟草<sup>ようや</sup>というものである事は漸くこの頃知った。

P5

[コメント]

文豪夏目漱石の最初の小説がこの「吾輩は猫である」。この文はその傍頭。中学生のときは読んでもさっぱりわからず、高校生になると少しずつ何が書いてあるかわるようなところもあり、その後、思い出す度に5年か10年に一度ずつくらい読むが、少しずつだが、だんだん頭の中に文章がスーと入ってくるところが出てくるようになるまでになった。ずいぶん時間がかかったものだ。漱石の作品は、どれも読めば読むほど趣深い味が出る。私にとってはスルメのようなものだ。都市の終わりや、年の始めに読むと元気が出て来てよい。

- 2009年11月29日 林明夫記 -